

〈研究ノート〉

ザクセン・エルツ山地の人形玩具産業（2）

——ザイフェンのウェブサイト “Kleines Lexikon der
Holzkunst” に基づいた製品の紹介——

古 川 裕 朗
古 川 順 子

（受付 2011年 5 月 31 日）

は し め に

本研究ノートの目的は、ドイツ・ザクセン州・エルツ山地における人形玩具産業の主要製品を確認し、そして紹介することにある。本稿が取り上げる「保養地ザイフェン（Kurort Seiffen）」はその産業の中心地の一つであり、ザイフェンは広報活動の一環として、公式ウェブサイト¹⁾上の「木工芸小事典（Kleines Lexikon der Holzkunst）」²⁾の中で、エルツ山地の主要製品の整理と周知を行ってきた。本稿ではこれに準拠することによって主要製品の紹介を行いたい。

具体的な製品の紹介を行うにあたって、予め断っておくべきことが4点ある。第一に本稿は前述の「小事典」に準拠してはいるが、その全面的な翻訳ではなく、その内容情報の主旨を伝達することに主眼を置いている。第二に、現在の日本において、エルツ山地の人形玩具を主題的に取り扱った学術的研究はほとんど見られないので、エルツ製品に対して本稿が付す日本語訳はまだ決して定訳と言うべきものではない。また一方において、実際のビジネスの現場ではすでに様々な製品が輸入・販売されており、日

1) <http://www.seiffen.de/>

2) <http://www.seiffen.de/lexikon.cfm>

本国内で習慣的に流通している名称というのも存在する。したがって、本稿では訳語を付す際の方針として、原語の意味が理解できるようできるだけ日本語あるいはカタカナ語に変換すること、そしてすでに国内において流通・定着している日本語名称あるいはカタカナ語が存在する場合はそれも併記することを心がけた。第三に、本稿ではエルツ山地の製品を代表するものとしてザイフェンの製品を取り上げるが、エルツ山地の西側とザイフェンが属する東エルツとの間では、製品の種類に違いがある。しばしば指摘されるように³⁾、彫刻術 (Schnitzen) 〔図17〕を中心とする西エルツに対し、ザイフェンの属する東エルツでは轆轤加工術 (Drechseln) 〔図18〕⁴⁾に基づいた製品作りが主流であった。だから、このように、両者の間には製品の傾向に大きな差があるということを申し添えておかななくてはならないだろう。そして第四に、エルツ製品の名称やその説明に関しては、たびたび工業技術に関連する専門用語が登場する。そのため、この点に関しては私たち筆者の浅学に起因する間違いの可能性を排除し切れない。関係各

-
- 3) エルツ山地の東側と西側では経済的な格差が存在したため、それに起因する形で木材加工業の形態に差異が生じてきたという。比較的裕福であった西エルツでは、余暇の時間を利用した個人による彫刻術が主流であったのに対して、比較的貧しかった東エルツでは轆轤加工術を主体とした分業生産体制が、実際に生計基盤を支えるものとして営まれてきた。これについては次を参照。Helmut Bilz, *Erzgebirgisches Spielzeugmuseum Kurort Seiffen, Museumsführer mit einem Überblick über die Entwicklung der erzgebirgischen Spielwarenindustrie von ihren Anfängen bis zum Jahre 1945*, Seiffen 1990, S. 13f.
- 4) 基本的に轆轤加工には二種類のやり方がある。皿や器を作るための横断轆轤加工 (Querholzdrechseln) と人形、花瓶、燭台などを作るための細長轆轤加工 (Langholzdrechseln) である。ザイフェン地域における木材轆轤加工の存在を初めて裏付ける文書には「皿および紡錘轆轤加工職人 (Teller- und Spindeldreher)」という二重になった呼び名が存在するが、これはその二種類の技能を駆使して様々な製品群に適用する能力のことを示唆している。18世紀の中頃のザイフェンでは、日用品の轆轤加工 (皿, 器, ボタン, 針入れなど) からおもちゃ製造へと移行した。その後は具象的な人形を作るための細長轆轤加工が中心的であった。以上については同サイト「木工芸小事典」を参照。

方面からの率直なご指摘をお願いしたい。

製 品 の 紹 介

- 〔1〕 待降節用ロウソク立て (Adventsleuchter)
- 〔2〕 ノアの箱舟 (Arche Noah)
- 〔3〕 積み木ボックス (Baukasten)
- 〔4〕 鉦夫／灯火の鉦夫 (Bergmann/Lichterbergmann)
- 〔5〕 轆轤花細工 (Blümchendreherei)
- 〔6〕 天使／灯火の天使 (Engel/Lichterengel)
- 〔7〕 音出しカラクリ (Klimperkasten)
- 〔8〕 キリスト降誕人形／クリッペ (Krippenfiguren)
- 〔9〕 クリスマス用ロウソク立て (Weihnachtsleuchter)
- 〔10〕 クルミ割り人形 (Nussknacker)
- 〔11〕 ピラミッド／クリスマス・ピラミッド
(Pyramide/Weihnachtspyramide)
- 〔12〕 煙出し人形／煙吐き人形 (Räuchermann)
- 〔13〕 飛梁／アーチ／シュヴィップボーゲン (Schwibbogen)
- 〔14〕 カンナ加工ツリー／シュパンバウム (Spanbaum)
- 〔15〕 オルゴール (Spieldose)
- 〔16〕 マッチボックス (Zündholzschachtelware)

〔1〕 待降節用ロウソク立て (Adventsleuchter)

待降節用ロウソク立てには、四つの腕を持った机上用のものと、吊るし型のものがある。たいていその色は赤か青である。ロウソク立ての上は、そこがまるで舞台であるかのように何らかの形象物で飾られることもある。ロウソクの差し込み口には待降節⁵⁾の週の数に合わせてロウソクが差し込

5) 待降節／アドヴェント (Advent) とは、11月30日に最も近い日曜日から降誕日前日 (クリスマスイヴ) までの期間、約4週間を指す。この期間はもともとイエ

まれる。1930年代以降は、流れ作業式の加工過程となり規格大量生産されるようになった。時としてモミの小枝で飾りつけたテーブルの上に置かれることがある。変わったものとしては家型になっているものがあり、これなどは待降節の日曜日ごとに一つずつ小さな扉を開けることができるようになっていく。

〔図1〕 待降節用ロウソク立て
(Adventsleuchter)



〔2〕 ノアの箱舟 (Arche Noah)

ノアの箱舟は18世紀以降のヨーロッパにおいて最も普及した家庭用玩具である。旧約聖書に由来するテーマ⁶⁾を扱っていることにより、箱舟遊び

は、クリスマス誕生を迎えるための「悔い改め」の性格を持っていたが、降誕日を待ち望む準備期間として、次第に楽しい行事としての性格を強く帯びるようになった。これについては『キリスト教礼拝・礼拝学事典』（今橋朗・竹内謙太郎・越川弘英監修、日本キリスト教団出版局、2006年）を参照。なお待降節の期間中は、第一アドヴェントすなわち最初の日曜から第四アドヴェントまで、合計4本のロウソクが日曜日毎に一本ずつ点されていき、様々な宗教的および因習的な行事が執り行われる。また待降節の期間はドイツでのクリスマス市の開催時期と重なる。都市や地域によって開催される時期や期間は異なるが、クリスマス市はもともとクリスマスのための装飾品や食料を準備する場である。そこでは、アドヴェンツクランツの材料となるもみの木やロウソク、室内やクリスマスツリーの飾り付けに用いる様々な人形や小物類、焼き菓子などが、待降節の始まりとともに販売され、エルツ地方の製品はこのクリスマス市では欠かせない存在となっている。なおアドヴェンツクランツとは輪状に編まれた花や葉のことで、日本ではクリスマスリースという名前で知られている。これは主にドアや壁に掛けられるが、ドイツではロウソク立てとして用いるため、テーブルなどに水平に置かれる。

- 6) 創世記6-10章に記されるノアの物語。以下は、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会、2001年）を参照して要約したものである。アダムを創造して以来地上では人間が増え、そして人間の悪が蔓延した。そのため神は、地上に洪水をもたらして、人間を地上からぬぐい去ることを決意し、神に唯一従う無垢な人間ノアに箱

は主として聖書の読み聞かせと結びついていて、ノアの箱舟は、しもうときには木製の入れ物として機能するのだが、子供にとっては“ごっこ遊び”用の舞台となる。エルツ山地は19世紀の終わりには、おもちゃの箱舟を作る重要な製造元となった。変化に富んだ様々な箱舟が作られ、舟型のものや方形のものや車輪の付いたものなどもある。屋根や壁は開くようになっていて、おもちゃの動物を手際よく収納することができる。

〔図2〕 ノアの箱舟（Arche Noah）



扱われる「被造物」の種類は、ラク

ダや象などの動物から、バッタ、てんとう虫、ホタルなどの昆虫にまで至り、合わせて300種類にまで膨らんでいる。これらはたいてい車輪材加工術／ライフエンドレーン（Reifendrehen）〔図19〕⁷⁾で作られる。

舟作りを命じる。さらに神は、地上のあらゆる生き物を雄と雌の一つがいにして、ノアの家族といっしょに箱舟に乗せるように命令する。ノアは命じられた通りにする。ノアが六百歳の時、洪水が地上に起こり、ノアは妻子や嫁たち、動物や鳥、地を這うものと共に、箱舟に乗った。水は150日の間地上で勢いを失わず、地上に生きるすべての命を奪った。その後ノアは地上の水がひいたことを、自らが放った鳩がオリーブの葉をくわえて戻ってきたことで知る。神はノアとその息子たちに「産めよ、増えよ、地に満ちよ。（9章1節）」と命じ、彼らとの間に契約を立てる。その契約により、神は洪水によって地上のものを滅ぼすことは二度としないとする。そしてまた神と地上のすべて肉なるものとの間に立てる契約のしるしとして、虹を造った。

- 7) 車輪材加工術／ライフエンドレーンはエルツ山地における玩具制作の大きな特色で、この技術をマスターして実際に使える者は今日でも少ない。この技法の特徴は、湿った車輪状のトウヒ材、つまりライフエン（Reifen）に、特別な轆轤加工用の工具を用いて、人形の輪郭、特に動物の輪郭を象っていくところにある。加工の過程で制作者がその輪郭の形を確認することはできず、ライフエンを切断

〔3〕 積み木ボックス (Baukasten)

19世紀の中頃、エルツ山地では最初の積み木ボックス工場ができた。1850年、ザイフェンの集落オーバーザイフェンバッハ (Oberseiffenbach) に積み木ボックス製造所「サムエル・フリードリヒ・フィッシャー (Samuel Friedrich Fischer)」(–1990) が設立され、これは世界における最初の産業的な積み木ボックス製造を意味する。エルツ製の積み木ボックス

〔図3〕 積み木ボックス (Baukasten)



は世界中に広まり、とりわけ「フレーベルの恩物 (Fröbelgaben)」⁸⁾ は有名である。またそうしたエルツ製の積み木ボックスは国際万博においてもたびたび賞を獲得した。今日、「メイドイン・エルツゲビルゲ」の木製積み木ボックスは、伝統、革新、

〔図20〕した後、ようやくその断面〔図21〕を目で見えて確認することができるが、もはやその時点で修正することはほとんどできない。したがって、ライフエンドレーン⁸⁾は、轆轤加工上のそして造形上の高度な能力、目測能力、形についての明確なイメージを必要とする。ライフエンドレーンの技術は1800年頃成立し、少なくともエルツ山地においてはザイフェンやその周辺ぐらいにしか定着していない。以上については同サイト「木工芸小事典」を参照。

- 8) フレーベルの発案した幼児のための教育的玩具としての遊具のこと。フリードリヒ・フレーベル (Friedrich Fröbel: 1782–1852) はドイツの教育学者で、幼稚園を創始したことで知られる。もともと幼稚園は、フレーベルが発案した「恩物」を実践する場であった。フレーベルは、乳幼児に与える遊具は、単純な基本的な形のものでありながら多様な要素を含み、持って生まれた創造の能力を引き出すものでなければならないと考えた。その遊具はすべて幾何学的な立体からなっており、6種類の恩物が、段階的にフレーベルによって考案されている。恩物という名称は、これら理想的な遊具が、子どものうちに秘められている神性を発揮させる贈り物である、と考えたフレーベルによって付けられた。その後、彼の考えや実践を受け継ぐ形で、いわゆる積み木などの教育的玩具として発展する。以上は、『フレーベル全集 第四巻 幼稚園教育学』(監修 小原國芳・莊司雅子、玉川大学出版部、1991年、初版1981年)の莊司雅子氏の解説に多くを拠っている。

モダンデザインの代名詞となり、現在でも他国に輸出されている。

〔4〕 鉾夫／^{ともしび}灯火の鉾夫（Bergmann/Lichterbergmann）

鉾夫と灯火との間には特別な情緒的関係が存在した。灯火は極めて危険な坑内作業においての照明源であり、また幸福と生活の象徴でもある。17世紀にはすでにエルツ山地の教会において、錫で作られた鉾員人形が祭壇ロウソクを立てるために役立てられていた。その後、木彫りの燭台鉾夫人形は個人的に使用されるようになる。玩具の分野においては轆轤加工された形になってからクリスマス人形と

して広く普及し、愛好されるようになった。その際、手や足はだいたい1920年ぐらいまではコネ土から自由に作られていた。坑内帽、尻当て皮、ナイフ入れ、白黒の彩色は轆轤加工されたザイフェンの灯火鉾夫の特徴である。

〔図4〕 鉾夫／^{ともしび}灯火の鉾夫
（Bergmann/Lichterbergmann）



〔5〕 轆轤花細工（Bblümchendreherei）

轆轤加工用のたがね（Dreheisen）を使って木を削ぎ上げたり、広げたりする技術を通じて、すでに19世紀には様々な花のモチーフを作るための想

〔図5〕 轆轤花細工
（Bblümchendreherei）



像力がかき立てられていた。たがねを特別に操作することによって長めの木材から木片を作り、それを段々に並べたり、丸く並べたりすることで花の茎への付き方を様々に表現する。使用される木材はたいてい菩提樹で、繊維の柔軟さを高めるためには、軽く湿っていると都合がよかった。そうしてでき

た白木状態の花は油性塗料で自然な感じに彩色される。小型化することで1920年以降は極めて小さなお花セットが作られた。その灌木や花壇の形状は、人形の家に備えられる用具として最も好まれたものの一つである。

〔6〕 天使／灯火の天使（Engel/Lichterengel）

灯火の天使の轆轤細工形態に関して1830年以前のことについては判然と

〔図 6〕 天使／灯火の天使
（Engel/Lichterengel）



しない面がある。この形態の重要なモデルとして考えられるのはニュルンベルクの金色天使（Rauschgoldengel）⁹⁾である。それがおそらくエルツ山地の木材轆轤加工職人によって円柱人形（Puppendocke）と結びつけられ、ロウソクの差し入れ口と木製の翼を備えた、現在の天使の直立不動の形態と

- 9) ニュルンベルクは、ドイツでも最大級のクリスマス市が開かれる都市としてよく知られている。カトリック色の強い南ドイツでは、クリスマス市のことを「クリストキントの市（Christkindlesmarkt）」と呼ぶことがあり、ニュルンベルクはその代表的な都市である。クリストキントとは幼子イエスのことで、ドイツの一部ではクリスマスに幼子イエスが二人の天使を伴い、子どもたちにプレゼントを配ると考えられていた。特にニュルンベルクのクリストキントの市では、金紙で作った冠と羽をもつ天使の人形がシンボルとなっており、クリストキントに付き従う天使がシンボルとしてイメージ化されたものが、一般に「金色天使」と呼ばれる。若林ひとみ『クリスマスの文化史』（白水社、2005年、初版2004年）に拠ると、エプロンをしたその姿は18世紀頃のニュルンベルク地方の民族衣装をモデルに作られたという。ドイツでクリスマスにプレゼントを配る役割を担った存在としては、いわゆるサンタクロースにあたるヴァイナハツマン、クリストキント、その他に12月6日にお菓子や果物などを配る聖ニコラウスなどがあり、そうした慣習は宗教や地域によって異なっている。これらに関しては、谷中央・長橋由理『ドイツ・クリスマスの旅』（東京書籍、2006年、初版1995年）が詳しい。

なった。ビーダーマイアー¹⁰⁾の時代は、この天使の形態に大きな影響を与えた。ひもで締め付けたウエストのくびれや花模様の装飾は今日でもなおも広く知られる特徴の一つである。弓形模様やギザギザ模様をした天使の冠はザイフェンでは鋳夫の坑内帽にも似た素朴な加工形態となった。

〔7〕 音出しカラクリ (Klimperkasten)

ハンドルを回すと動く伝統的なからくり玩具の一種である。「アルトドルファー・ライアー」という手回しオルガンの原理にしたがって、音を出す。箱の中でピンと張られた金属弦を羽幹が弾くと音が出るようになっている。その音を出す箱部分の上では、ダンスをするカップルや馬に乗った人が回転したり、農婦がバター作り用の桶の中

〔図7〕 音出しカラクリ
(Klimperkasten)



でかき混ぜ棒を動かしたり、あるいは小屋の中の鳩が回ったり、鳥が餌をついばんだりする。

〔8〕 キリスト降誕人形／クリッペ (Krippenfiguren)

「クリッペ (Krippe)」とは直接的には飼い葉桶^{うまや}のことであり、ここではキリスト降誕の厩^{うまや}の情景¹¹⁾を表現した群像のことを指す。エルツ山地の

10) 1814年から15年にかけてのウィーン会議以降、ウィーンで3月革命が起こる1848年までの間、オーストリアやドイツでは社会の中間層を担い手としたビーダーマイヤー様式と呼ばれる文化傾向が見られた。この様式は上品さや可憐さを残しながらも華美ではないという特徴を備える。これについては『特別展 やすらぎのオーストリア カフェとタバコにみるウィーンの文化史』（たばこと塩の博物館編集・発行、2009年）を参照。

11) キリスト降誕の情景は、クリッペや降誕劇を通してクリスマスのシーズンに繰り返されるイメージである。厩の場面に登場する人物は『聖書 新共同訳』（日本

〔図 8〕 キリスト降誕人形／クリッペ
(Krippenfiguren)



クリッペ作りは18世紀以来の確固とした伝統のもとにある。最初、西エルツにオリエント風の彫刻が現れた。後になってそれが次第に土着の要素、特に鉱夫文化の要素を摂取していった。エルツ山地のクリッペ作りは今も昔も民芸を通じた民間信仰の一形態である。ザイフェンでは1850年以

降クリッペが調度品の一種として販売されるようになった。それは中心となる聖書関連の人形から牧羊、木々、柵にまで至るセット物の商品で、厚紙や木でできた箱の中に納められていた。ただし「ザイフェナー・クリッペ」は南欧のクリッペとは異なって、芸術的に見事な自然主義に到達することを全く望んではない。むしろ玩具として大量生産することが重要だったのであり、だからこそ人形は轆轤加工されたり粘土で作られたりしたのである。

〔9〕 クリスマス用ロウソク立て (Weihnachtsleuchter)

19世紀、バロックの余波がエルツ山地のクリスマス用ロウソク立ての出現に影響を与えた。そのとき手本となったのは、1670年頃ハイデルバッシャー (Heidelbacher) のガラス工場で作られたもので、ザイフェンの教会にあるガラス製の吊るし型ロウソク立てのような壮麗なガラス製のシャンデリアだった。フランドル地方に起源を持つ多数の腕を備えた金属製のク

聖書協会、2001年)を参照すると、マタイ伝においては占星術の学者3人、幼子イエス、母マリア、ルカ伝においては厩へ導くものとしての天使たち、羊飼、マリア、ヨセフ、幼子イエスとなっている。これらの人物に羊、馬、牛、ロバ、あるいは犬やラクダが加わり、クリッペは構成される。若林ひとみ『クリスマスの文化史』(白水社、2005年、初版2004年)によれば、この主に聖家族と厩の模型からなる降誕の情景の再現は、イタリア語でプレゼピオといいイタリアが発祥地であるという。

モ型ロウソク立てが、結果としてこの轆轤加工職人たちの地域における典型的なクモ状の形態に影響を与えたのかもしれない。特徴のある木製の中心軸には、轆轤加工されたS字型のロウソク・ホルダーが、揺れ動くような状態で取り付けられ、この基本形態にさらに松かさ、鐘、飾り玉、星などが飾りつけされる。

〔図9〕 クリスマス用ロウソク立て
(Weihnachtsleuchter)



〔10〕 クルミ割り人形 (Nussknacker)

クルミは、象徴的意味を多く含んだものとしてクリスマスの時期に用いられる伝統的な装飾品で、命の芽生え、新しいものや知られざるものの先ぶれなどを意味する。クルミの中身を取り出そうとして外側の殻を割ることはしばしば礼拝的行為を意味することがあった。すでに18世紀には「クルミ噛み付き人形 (Nußbeißer)」がとりわけ好まれて、ちょっとした皮肉と大衆向けの社会風刺の要素を備えた人形として制作された。今日ザイフェンのクルミ割り人形は世界的に有名になったが、それを最初に作った者の

一人にヴィルヘルム・フリードリヒ・フュヒトナー (Wilhelm Friedrich Fuchtnner) がいる。彼は1870年に、轆轤加工によって何らかの形態を模したクルミ割り人形の制作を副業として始めたのだった。おもちゃ風に作られた単純な兵隊、鉾夫、消防隊員、警察官などは最初の十年に作られた品目である。

〔図10〕 クルミ割り人形
(Nussknacker)



〔11〕 ピラミッド／クリスマス・ピラミッド (Pyramide/
Weihnachtspyramide)

エルツ山地の回転ピラミッド (Drehpyramide) は1800年頃作られた。そこには灯火の風習が鋳夫細工と明確に一体化した形で表れている。その前身は、花飾りを施された、ピラミッド風の動かない灯火台、あるいは機械的に稼働する炭坑模型であった。巻き上げ装置型ピラミッド (Göpelpyramide) は、鋳夫の大工技術に関する記憶をとどめたものであり、クリスマス・ピラミッドと鋳山業との密接な関係を極めてはっきりと表している。棒組みピラミッド

(Stabpyramide) の形は古来の灯火用の足場に基づいて成立した。19世紀中葉以降のザイフェン地域にとって特に重要なのは、均整がとれていて細かなところまでよくできている階層ピラミッド (Stufen- und Stockwerkspyramide) である。それは贅沢な高額商品であった。このピラミッドの与える印象の特徴は、とりわけ轆轤加工された基本形態と彫刻を施した建築部分とのコントラストにある。個々の層には人形と動物がそれぞれのテーマをもって設置され、その内容としては聖書に関係するクリスマス物語の他に、鋳夫の体験世界やその地域の生活なども含まれる。

〔図11〕 ピラミッド／クリスマス・ピラミッド
(Pyramide/
Weihnachtspyramide)



〔12〕 煙出し人形／煙吐き人形 (Räuchermann)

エルツ山地のクリスマスには数百年も前から香煙の香りが欠かせない。木炭の粉、ヨーロツパブナ、ジャガイモでんぷん、香料のねり粉からでき

た手作りの薫香ロウソクが、西エルツ山地ではすでに1800年以前から作られていた。パイプを用いた喫煙習慣が民衆の間に広まり、これが玩具職人にとっては、空洞のある人形の中に薫香ロウソクを入れるきっかけになったのだろう。最初の本製煙出し人形は腕、足、顔がねり粉から作られていて、これは1850年頃ザイフェン・ハイデルベルガー（Seiffen-Heidelberger）の轆轤加工職人フェルディナント・フローズ（Ferdinand Frohs）が作ったとされている。口にパイプを加えて煙をふかす煙出し人形は、トルコ人¹²⁾ や心温まる村人の像などを表現するようになった。

〔図12〕 煙出し人形／煙吐き人形
(Räuchermann)



〔13〕 飛梁／アーチ／シュヴィップボーゲン (Schwibbogen)

シュヴィップボーゲンは250年以上も前からエルツ山地のクリスマスには欠かせないものであった。その発生地は鉾山街のヨハンゲオルゲンシュタット（Johanngeorgenstadt）で、そこでは1726年頃、鉾山金属細工師のヨハン・テラー（Johann Teller）が最初の錬鉄製のシュヴィップボーゲンを作ったと言われている。「シュヴィップボーゲン（飛梁）」という名称は、建築学上の概念に基づいていて、それは屋外の2つの壁の間に立ち、そしてその壁によって支えられている空中アーチを意味する。最終切羽で働く熟練鉾夫たちは、「鉾山のクリスマスイブ」の朝課のために、燃え盛る坑内灯を半円型に、すなわち坑道の坑口を暗示する形に壁に吊るしたという

12) “喫煙するトルコ人”は、煙出し人形においては当初から主要なモチーフであり、現在でも多く見られる。

〔図13〕 飛梁／アーチ／シュヴィップ
ボーゲン (Schwibbogen)

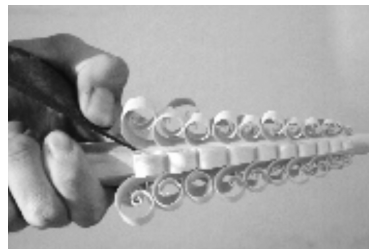


ことで、伝承によればシュヴィップボーゲンの形態はこのことに由来すると言われている。木製のシュヴィップボーゲンはようやく20世紀になって登場した。それは、糸鋸を用いて作られた切り抜き影像としてであったり、轆轤加工された具象的場面の表現を内部に備えた木枠としてであったりした。

〔14〕 カンナ加工ツリー／シュパンバウム (Spanbaum)

ある一定の条件の下で丸まるという木質繊維の特徴は今も昔も玩具の製造に利用されてきた¹³⁾。すでに1850年のヴァルトキルヒェン(Waldkirchen)の見本帳には、シュパンバウムを彷彿とさせる木の玩具が掲載されていた。ようやく1920年頃になってまた、こうした古い技術の再生に手が付けられ、工芸的な意味において新しく生き返った。その中で最もよく知られた例がこのシュパンバウムであり、そうこうするうちにクリスマスの装飾品の一つにしっかりと数え入れられるようになる。シュパンバウムに利用できるのは成熟しきつた、ふしをとった木で、たいていは菩提樹が使われる。いわゆる「地下室の湿気」を含むと、繊維は脆さがとれて加工しやすくなり、突きノミを用いて簡単に木片の反り返った状態に削り出すことができる。最初の形態は轆轤加工された単なる心棒で

〔図14〕 カンナ加工ツリー／シュパン
バウム (Spanbaum)



13) 日本でも“削りかけ”として知られる類似の伝統的技法が存在する。

あり、それが台架へと装着され、巻き毛状のものが4から8列に並ぶように掘り起こされる。その際、木の先端から下方に向けて加工が行われる。

〔15〕 オルゴール（Spieldose）

オルゴールは木製ピアノに範をとっており、1800年以来、変わることなくエルツ山地の玩具の品目に数えられてきた。オルゴールの上はクリスマスの思想を表すいわば舞台のようなものであって、内部で奏でられるオルゴールの旋律が、その思想にさらに豊かな含蓄を付け加える。持続的な回転運動の詩情、音楽と人形との対話、かわいらしいメロディーから木の具体性への変換、これらの豊かな魅力がきっかけとなって、エルツ山地ではおよそ1935年以降、子供や物語の情景を伴った多彩なオルゴールが作られてきたと考えられる。

〔図15〕 オルゴール（Spieldose）



〔16〕 マッチボックス（Zündholzschachtelware）

1905年に「ストーブベンチを備えたエルツ山地の農家の居間」という形で、初めてマッチ箱に入ったミニチュア玩具が登場した。農家の居間を縮尺してお土産用として考案されたもので、その家具調度品類もマッチ箱に貼付けられていた。ザイフェン一帯では、年々次々と100を超える様々なタイプのものが追加され、1年あたり10万個もの大量生産がなされていた。着想に富み、技巧を凝らしたものが多く、箱詰め仕方独特であって、舞台が箱の内部にしっかりと貼付けられたものの他にも、組み立て式のものや複数の人数で行うとても小さなゲームを納めているものも存在する。玩具の売れ行きが芳しくなかった時代ですらも、この安価な玩具は購買者

〔図16〕 マッチボックス (Zündholzschachtelware)



〔図17〕 彫刻術 (Schnitzen)



〔図19〕 車輪材加工術／ライフエンド
レーン (Reifendrehen)



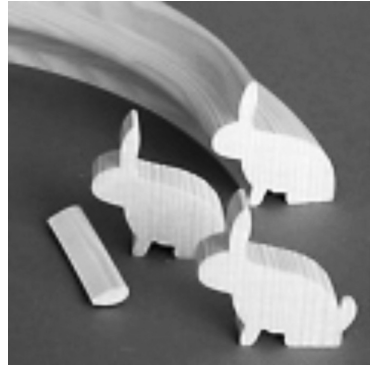
〔図18〕 轆轤^{ろくろ}加工術 (Drehsehn)



〔図20〕 ライフェンの切断



〔図21〕 ライフェンの断面



を獲得し、特に使用される箱は廉価なので低所得層にもよく売れた。

謝辞

おもちゃの村ザイフェンの観光協会のご好意により私たちはウェブサイト上の写真の使用を許された。これでもって、観光協会および支配人の Börner 氏に対し、心よりお礼を申し上げたい。

Dankesworte

Die Benutzung der vielen Fotos auf der Webseite von Seiffen wurde durch die Liebenswürdigkeit des Tourismusvereines Spielzeugdorf Kurort Seiffen e. V. genehmigt. Herzlichst danken wir hiermit ihm und Herrn Geschäftsführer Börner für ihre Freundlichkeit.